

くらしナビ ♡ ライフスタイル

初期から「暮らしぶり」着目

認知症
新時代

第2部 医療・暮らし支える ②

●住環境整備手助け

取り組む「桜新町アーバンクリニック」を紹介された。クリニックの認知症専門医が薬を調整し、レビー小体型認知症に多い睡眠の異常は治まった。さらに看護師の片山智栄さんらが分都さん宅を訪ね、住宅内や浴室に手すりをつけたり、浴槽に滑り止めのマットを入れるなど、住環境の改善のため支援した。

片山さんは言う。

「アルツハイマー型認知症の人は、初期から足腰が弱くなったりはしないので、急いで手すりをつける必要はありません。一方、レビー小体型の人は、足がうまく運べないことが多い。タイプに応じた環境整備が必要なのです」

確かに、分都さんは認知症と診断される前から、うまく歩けないと感じていた。「一番困ることは歩けなくなることだよ。だれもみてくれる人はいないもん」

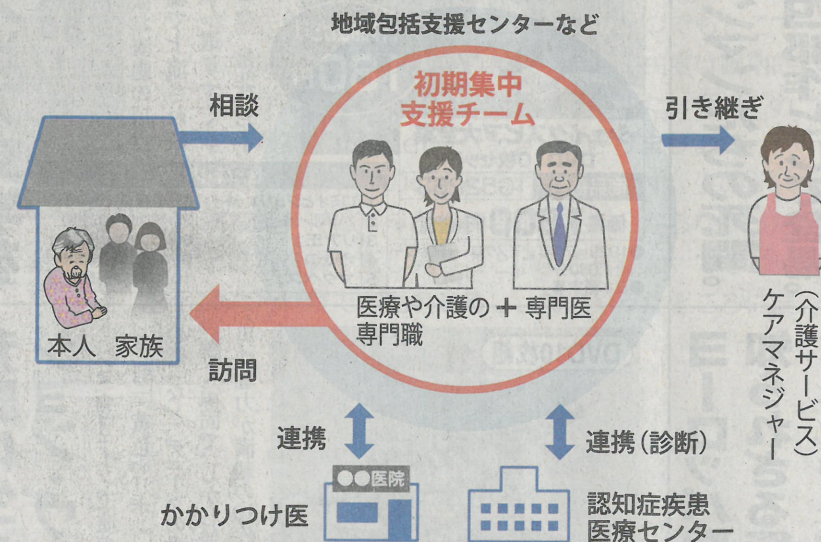
住まいの障害が解消されたおかげで、滑るのが怖くて入れなかったお風呂も楽しめるようになった。片山さんたちは、分都さんが自宅で転倒しないよう、室内でも靴を履くことや、頭を守るためつばのついた帽子をかぶることもアドバイスした。

集中支援を受けたのは半年間だったが、今でも不安の訴えがあればチームのメンバー



認知症初期集中支援チームのアドバイスで、段差のある浴室の入り口に手すりがついた。分都さんは「風呂に入りやすくなった」と喜ぶ＝東京都世田谷区で

認知症初期集中支援チームの役割



●訪問医が不足

初期集中支援のポイント、さまざまな立場の専門家が、単なる症状だけでなく「暮らしぶり」に接すること。精神科医の新川祐利さんは「外来にパリッとしたスーツを着て来ても、家での服装がめっちゃくちゃだったり、薬を飲んでいないと言っている、全然飲めていなかったり。家での様子をみればすぐ分かる」と、訪問の重要性を語る。

課題は、訪問診療する精神科医が、まだ少ないこと。事業の拡大には、医師が認知症の本人の暮らしぶりにもっと着目することが不可欠だ。

【山崎友記子、写真も＝ユウキ】

●介護保険につなぐ

「加代子さんが前に診てもらった乳腺クリニックの先生に頼まれて、検診に来ました」

まだ雪の残る2月末。仙台市内で一人暮らしをしている加代子さん(82)＝仮名＝の自宅を、同市の「いずみの杜診療所」の精神科医、山崎英樹さんと、看護師や介護福祉士らとともに訪ねた。認知症の診断とは言いえない。警戒させないためだ。山崎さんは、加代子さんのなじみのある医師の名前を出して、問診を始めた。

加代子さんには認知症とみられる症状がある。近くに住む親戚が火の不始末などを心配していたが、本人は病院にかかりたがらず、介護保険の申請もできないでいた。

市の地域包括支援センターを通じて、加代子さんの件が診療所に入った。診療所は昨秋、認知症の人の早期支援を目的に、家族らの相談を受け付けている地域連携室を設置していた。

「夜は眠れますか」。山崎さんは穏やかな口調で問う。加代子さんは「あります」と

認知症初期集中支援チーム

各自治体の地域包括支援センターや診療所を拠点に、看護師や保健師、作業療法士や介護福祉士などの専門職や専門医によるチームが、認知症の人や、認知症と疑われる人の家庭を訪問し、本人や家族の話の聞き取りや暮らしぶりの確認などから、生活の障害となっている原因を把握し、介護サービスの導入や医療への橋渡しなどを検討する仕組み。

厚生労働省の認知症施策推進5カ年計画(オレンジプラン)に盛り込まれ、12年度に国の研究事業が始まった。13年度から全国の14市区町でモデル事業がスタート。14年度は全国100カ所での実施を目指しており、15年度には全自治体に実施が義務付けられる。